

熱中症に関する意識・実態調査 2020

2020年7月21日
株式会社タニタ

健康総合企業のタニタは、インターネットリサーチで「熱中症に関する意識・実態調査 2020」を実施し、その集計結果を公開しました。この調査は2020年6月5日～6月8日の4日間、全国の15歳～69歳の男女(1,000名)を対象に行ったものです。(調査協力会社: ネットエイジア株式会社)

— 調査結果トピックス —

第1章 熱中症の危険性に対する意識と“暑さ指数(WBGT)”に対する認知

P2-5

- 外出自粛の影響か？ 屋外での活動中に熱中症を意識する人は昨年より減少傾向 *
- 熱中症を意識するようになったきっかけ 「新しい生活様式での熱中症が話題になっていた」が4人に1人 *
- 暑さ指数(WBGT)の認知率は45.8%と、昨年から3.8ポイント上昇
- 熱中症にならないために気にしているもの 屋内・屋外ともに「気温」が最多、「暑さ指数(WBGT)」は1割未満 *
- 熱中症の危険度を判断するための情報源 「テレビの天気予報」7割、「身の回りの計測器」1割 *
- 「新しい生活様式では“適宜マスクをはずすこと”が熱中症予防のポイントになっていること」を約半数が知らない *
- 暑熱順化と熱中症リスクの関係性の認知 「暑さに慣れていないと熱中症になりやすいこと」を知っている人は7割
- 「乳幼児は熱中症になりやすいこと」認知率は5割、「高齢者は熱中症になりやすいこと」では7割強

第2章 熱中症の症状と熱中症対策

P6-10

- 実は熱中症！？
「熱中症になったという自覚がある」は約2割の一方、「暑さによって何らかの不調を経験した」は7割半
- 「暑さによって引き起こされたからだの不調を自覚したことがある」10代男性の約9割
- 「熱中症の自覚がなくても熱中症が疑われる症状を経験」熱中症になったという自覚がない人の約7割
- 自分は大丈夫という過信は禁物！ 「熱中症にならない自信がある」5人に1人、10代男性では3人に1人
- 「暑い時期に熱中症対策を行っていない」3割 *
- 実践している熱中症対策 1位「水分補給」2位「扇風機・エアコン使用」、「温湿度計の使用」は6人に1人ととどまる *
- 熱中症に対する知識 「熱中症になったときの対応・処置を知らない」5割、「熱中症について学んだことはない」6割

第3章 新型コロナウイルス感染症拡大による行動変容とそれに伴う熱中症リスク

P11-14

- 「新型コロナウイルス感染症拡大で、自宅で過ごす時間が増えた」7割強、暑熱順化の不足が懸念される結果に
- 「新型コロナウイルス感染症拡大で、自宅で運動をする時間が増えた」約3割、屋内での熱中症リスクに要注意
- 今夏のマスク着用意向 「夏になってもマスクの着用を続けようと思う」7割半、「猛暑日でも着用しようと思う」6割 *
- 「屋外で十分な距離が確保できる場合もマスクを着用しようと思う」約6割 *
- 「夏に外で運動をする際もマスクを着用しようと思う」4割強、マスク着用による熱中症リスク増大が懸念される結果に *
- 「夏にエアコンをつけていてもこまめに換気しようと思う」7割、換気時には熱中症対策にも意識を向ける必要あり *
- 実は勘違い？ “夏は室温を28℃以下にキープ”する人の半数以上が「エアコン使用時は設定温度を28℃に」と回答
- 「自宅より職場のほうが快適」在宅勤務予定者の6割強
- 「在宅勤務中は水分補給を忘れがちになっていると思う」在宅勤務予定者の5割強
- 「在宅勤務中、電気代の節約のためエアコン利用を極力控えたい」在宅勤務予定者の半数以上 *

* の項目については、6月24日に「熱中症に関する意識・実態調査 2020(速報)」で発表しています。

第1章 熱中症の危険性に対する意識と“暑さ指数(WBGT)”に対する認知

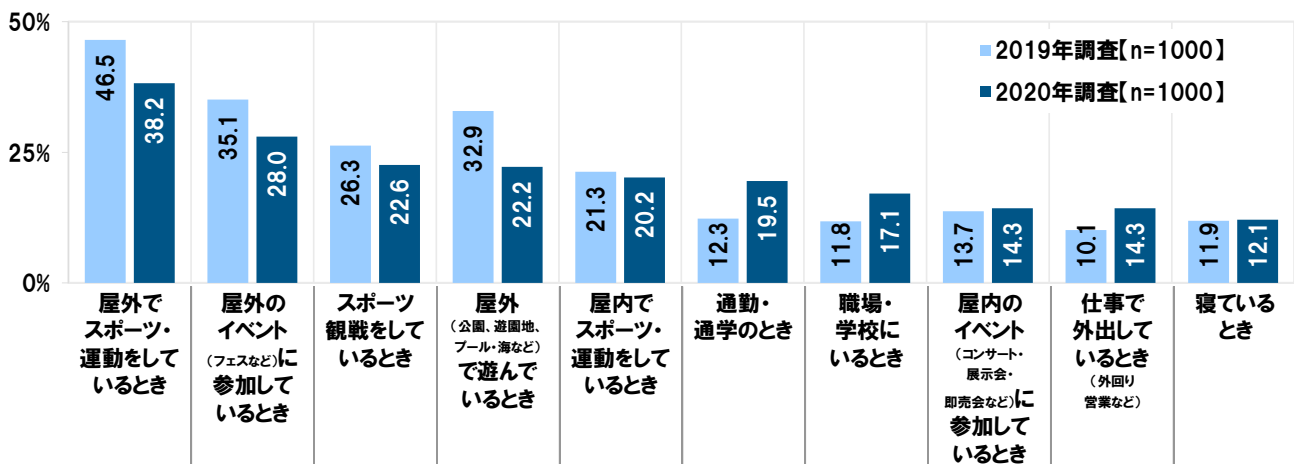
■外出自粛の影響か？ 屋外での活動中に熱中症を意識する人は昨年より減少傾向 *

■熱中症を意識するようになったきっかけ「新しい生活様式での熱中症が話題になっていた」が4人に1人 *

全国の15歳～69歳の男女1,000名(全回答者)に、熱中症を意識するのはどのようなときか聞いたところ、「屋外でスポーツ・運動をしているとき」(38.2%)が最も高く、次いで、「屋外のイベント(フェスなど)に参加しているとき」(28.0%)、「スポーツ観戦をしているとき」(22.6%)、「屋外(公園、遊園地、プール・海など)で遊んでいるとき」(22.2%)、「屋内でスポーツ・運動をしているとき」(20.2%)となりました。

昨年(2019年)の調査結果と比較すると、「屋外でスポーツ・運動をしているとき」(2019年46.5%、2020年38.2%)は8.3ポイントの下降、「屋外のイベント(フェスなど)に参加しているとき」(2019年35.1%、2020年28.0%)は7.1ポイントの下降、「屋外(公園、遊園地、プール・海など)で遊んでいるとき」(2019年32.9%、2020年22.2%)は10.7ポイントの下降となりました。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う外出自粛要請の影響で、自宅で過ごす機会が増えたことから、屋外での活動中に熱中症を意識する人が減ったのではないのでしょうか。

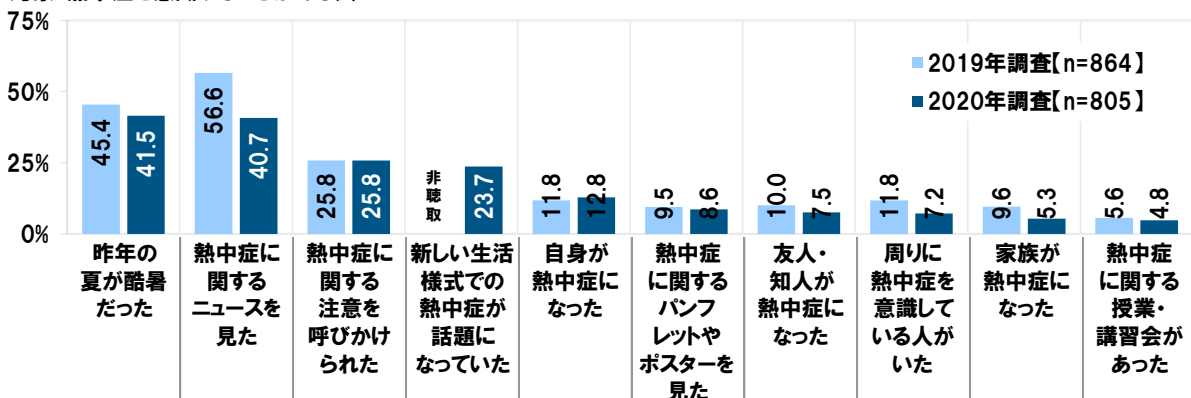
◆熱中症を意識するのはどのようなときか【複数回答形式】 ※2020年調査の上位10位までを表示



熱中症を意識することがある人(805名)に、熱中症を意識するようになったきっかけを聞いたところ、「昨年の夏が酷暑だった」(41.5%)と「熱中症に関するニュースを見た」(40.7%)が高くなりました。酷暑を過ごした経験や、熱中症関連のニュースを見聞きした経験から、熱中症を意識するようになった人が多いようです。続いて、「熱中症に関する注意を呼びかけられた」(25.8%)、「新しい生活様式での熱中症が話題になっていた」(23.7%)となっています。

◆熱中症を意識するようになったきっかけ【複数回答形式】 ※2020年調査の上位10位までを表示

対象:熱中症を意識することがある人

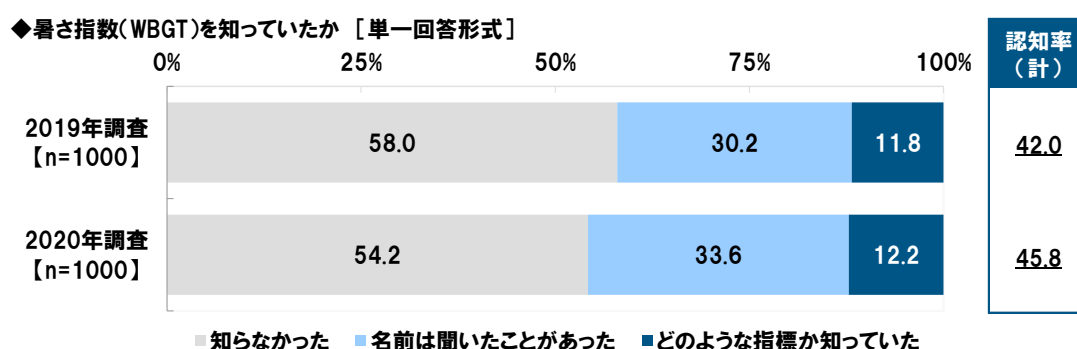


■暑さ指数(WBGT)の認知率は45.8%と、昨年から3.8ポイント上昇

■熱中症にならないために気にしているもの 屋内・屋外ともに「気温」が最多、「暑さ指数(WBGT)」は1割未満 *

今年7月1日から、環境省と気象庁では関東甲信地方の1都8県を対象に、暑さ指数(WBGT)を基準とした「熱中症警戒アラート(試行)」を先行実施し、来年夏から全国で本格展開するとしています。この暑さ指数(WBGT)について、どのくらいの人知っているのでしょうか。

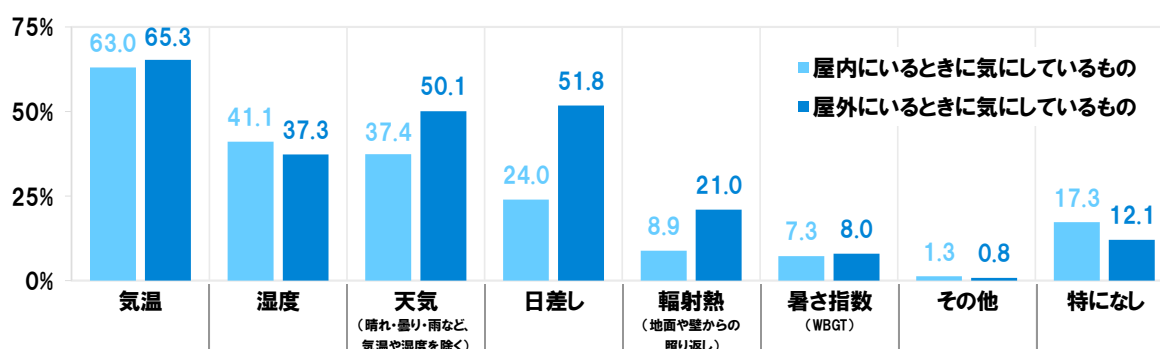
全回答者(1,000名)に、暑さ指数(WBGT)を知っていたか聞いたところ、「知らなかった」は54.2%となったのに対し、「名前は聞いたことがあった」は33.6%、「どのような指標か知っていた」は12.2%で、認知率は45.8%と、昨年(2019年)の調査結果(42.0%)から3.8ポイント上昇しました。



次に、熱中症にならないために気にしている(注意を払っている)ものを聞いたところ、《屋内にいるとき》では「気温」(63.0%)が最も高く、次いで、「湿度」(41.1%)、「天気(晴れ・曇り・雨など、気温や湿度を除く)」(37.4%)、《屋外にいるとき》では「気温」(65.3%)が最も高く、次いで、「日差し」(51.8%)、「天気(晴れ・曇り・雨など、気温や湿度を除く)」(50.1%)となりました。屋内・屋外ともに、気温に注意を払っている人が多いようです。そのほか、「暑さ指数(WBGT)」(屋内7.3%、屋外8.0%)は1割未満となりました。

暑さ指数(WBGT)が28℃以上になると、熱中症による救急搬送者数や重傷者数が増加するといわれています。暑さ指数(WBGT)は、熱中症を予防する目的で考案された、暑さの要因となる気温・湿度・輻射熱を取り入れた指標で、順番に1:7:2の割合で反映されています。この割合をみると気温以外に湿度や直射日光を含む輻射熱にも注意する必要性がわかります。熱中症にならないために、気温だけに意識を向けるのではなく、それよりも熱中症の発生と関係性が高い指標である暑さ指数(WBGT)やその他の暑さの要因にも意識を向けることが必要ではないでしょうか。

◆熱中症にならないために気にしている(注意を払っている)もの [各複数回答形式] 全体[n=1000]

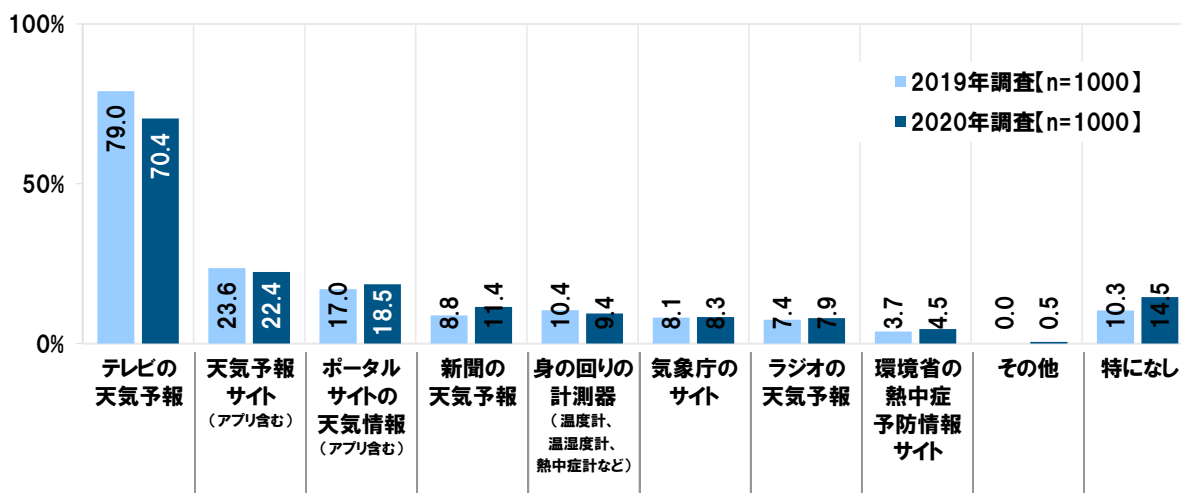


■熱中症の危険度を判断するための情報源「テレビの天気予報」7割、「身の回りの計測器」1割 *

今年7月1日から関東甲信地方1都8県で先行実施される「熱中症警戒アラート」は、これまで発表されている「高温注意情報」に代わって運用されることとなっており、この情報は気象庁がもつ自治体や報道機関向けの連絡網を利用して発信されます。それでは、どのような情報から熱中症の危険度を判断しているのでしょうか。

全回答者(1,000名)に、どのような情報から熱中症の危険度(その日の熱中症のなりやすさ)を判断しているか聞いたところ、「テレビの天気予報」(70.4%)が突出して高く、次いで、「天気予報サイト(アプリ含む)」(22.4%)、「ポータルサイトの天気情報(アプリ含む)」(18.5%)、「新聞の天気予報」(11.4%)、「身の回りの計測器(温度計、温湿度計、熱中症計など)」(9.4%)となりました。昨年と同様に、「テレビの天気予報」を情報源としている人が多数を占めましたが、その割合は2019年に比べ8.6ポイント減少しています。また、「特になし」と答えた人の割合は、2019年が10.3%、2020年が14.5%と、熱中症に関する危険度を判断する情報を特に入手していない人の割合がわずかに増加しました。「熱中症警戒アラート」では、熱中症への注意を促す呼びかけとともに、対象都県内の観測地点毎の最高暑さ指数(WBGT)や熱中症予防におけるポイントが併せて発表されます。これらの情報を積極的に入手して、一人ひとりが熱中症対策を行うことが重要です。

◆どのような情報から熱中症の危険度(その日の熱中症のなりやすさ)を判断しているか【複数回答形式】

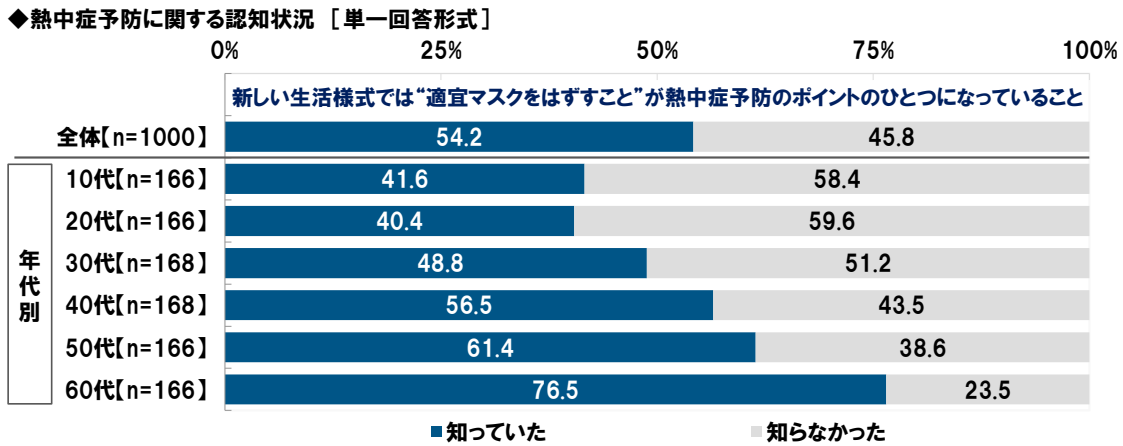


- 「新しい生活様式では“適宜マスクをはずすこと”が熱中症予防のポイントになっていること」を約半数が知らない *
- 暑熱順化と熱中症リスクの関係性の認知「暑さに慣れていないと熱中症になりやすいこと」を知っている人は7割
- 「乳幼児は熱中症になりやすいこと」認知率は5割、「高齢者は熱中症になりやすいこと」では7割強

全回答者(1,000名)に、熱中症予防や熱中症のなりやすさについて、認知状況を聞きました。

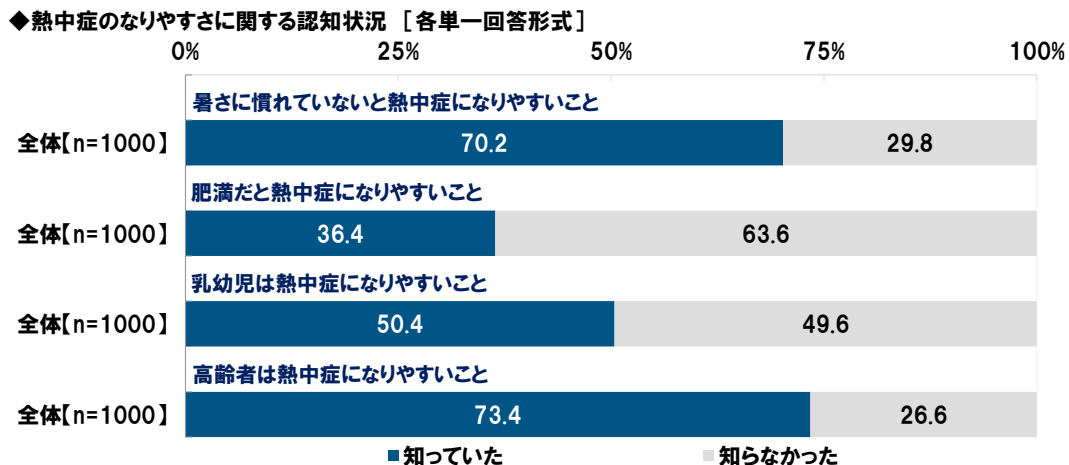
熱中症予防に関して聞いたところ、《新しい生活様式では“適宜マスクをはずすこと”が熱中症予防のポイントのひとつになっていること》では「知っていた」(以下、認知率)は54.2%、「知らなかった」は45.8%となりました。“新しい生活様式”では、基本的な感染症対策としてマスクの着用が挙げられています。しかし、高温や多湿の環境でマスクを着用すると、呼吸数や体感温度の上昇などの負担がからだにかかり、熱中症のリスクが高まります。そのため、屋外にいる場合や、フィジカル・ディスタンスが保たれている場合は適宜マスクをはずすことが推奨されていますが、約半数の人がこのことを知らないようです。

年代別にみると、「知らなかった」と回答した人の割合は若い年代ほど高くなる傾向がみられ、10代では58.4%、20代では59.6%でした。



熱中症のなりやすさに関して聞いたところ、《暑さに慣れていないと熱中症になりやすいこと》についての認知率は70.2%となりました。徐々に暑さに慣れることを“暑熱順化”といい、この暑熱順化がうまくできていないと、熱中症のリスクが高まります。この関係性については、全体の7割が認知している結果となりました。

《肥満だと熱中症になりやすいこと》では認知率は36.4%、《乳幼児は熱中症になりやすいこと》では50.4%、《高齢者は熱中症になりやすいこと》では73.4%となりました。



第2章 熱中症の症状と熱中症対策

■実は熱中症！？

「熱中症になったという自覚がある」は約2割の一方、「暑さによって何らかの不調を経験した」は7割半

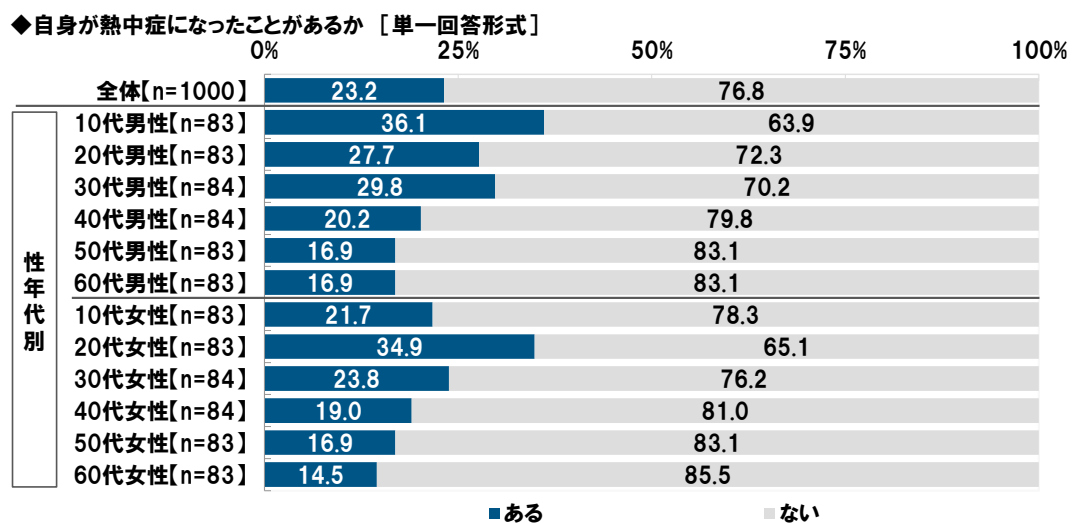
■「暑さによって引き起こされたからだの不調を自覚したことがある」10代男性の約9割

■「熱中症の自覚がなくても熱中症が疑われる症状を経験」熱中症になったという自覚がない人の約7割

熱中症の経験について質問しました。

全回答者(1,000名)に、自身が熱中症になったことがあるか聞いたところ、「ある」は23.2%、「ない」は76.8%となりました。“熱中症になった”という自覚がある人は約2割にとどまりました。

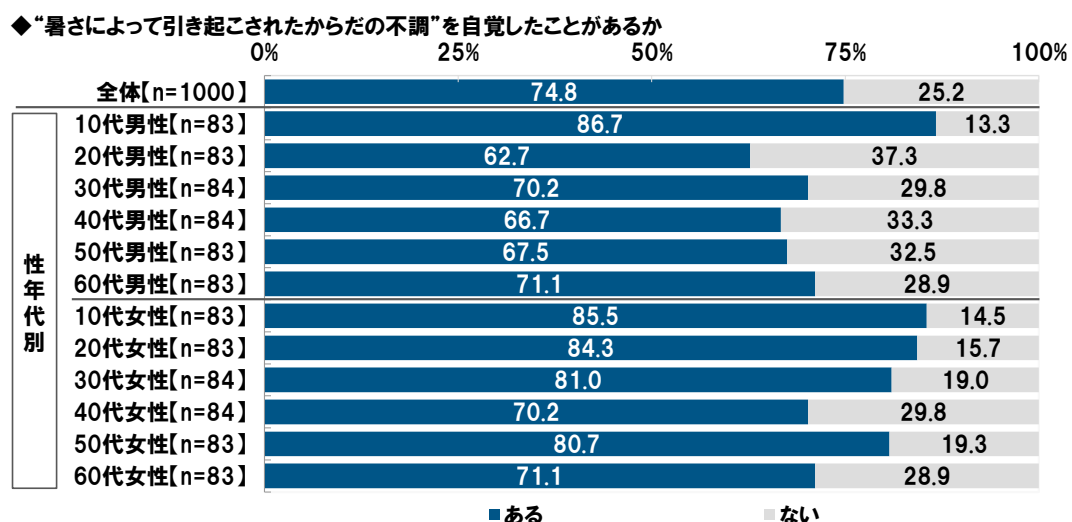
性年代別にみると、熱中症になったという自覚がある人の割合は、10代男性(36.1%)と20代女性(34.9%)が高くなりました。



では、暑さによって何らかの不調を経験したことがある人はどのくらいいるのでしょうか。

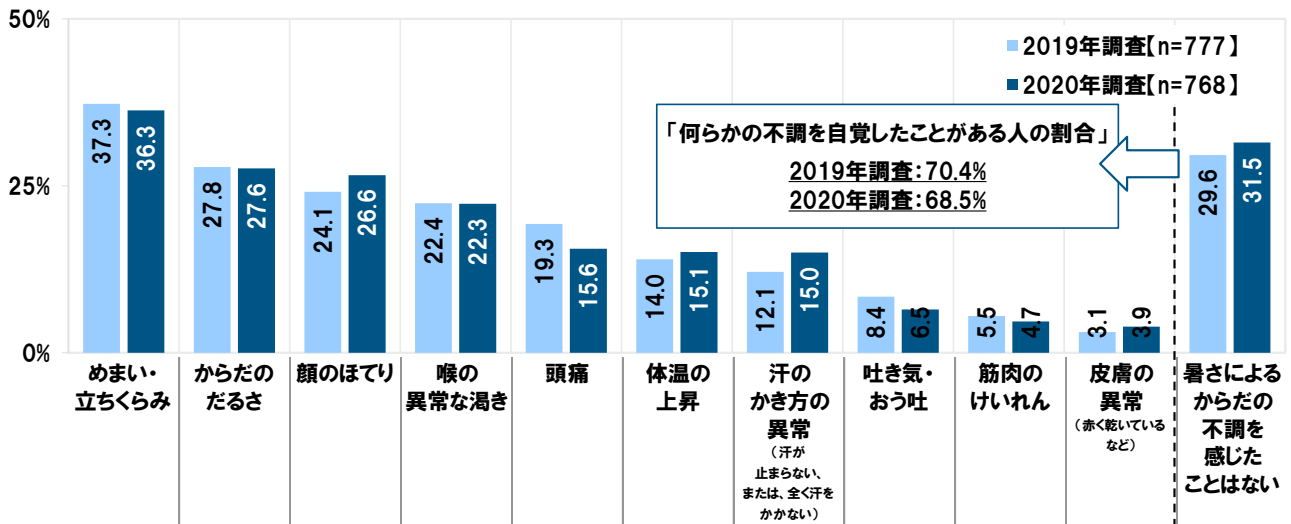
“暑さによって引き起こされたからだの不調”を自覚したことがあるか聞いたところ、「ある」は74.8%となりました。“熱中症になった”という自覚がある人は少数派だった一方で、多くの人が暑さで不調を感じている実態が明らかとなりました。

性年代別にみると、「ある」と回答した人の割合は男女とも10代が最も高く、10代男性は86.7%、10代女性は85.5%でした。

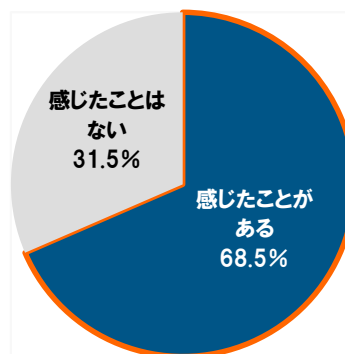


熱中症になったことがないと回答した人(768名)に、“暑さによって引き起こされた不調”で自覚したことがあるものを聞いたところ、「めまい・立ちくらみ」(36.3%)が最も高く、次いで、「からだのだるさ」(27.6%)、「顔のほてり」(26.6%)、「喉の異常な渴き」(22.3%)、「頭痛」(15.6%)となり、熱中症の症状にあてはまる何らかの不調を自覚したことがある人の割合は68.5%でした。“熱中症になった”という自覚がなくても、実際は熱中症が疑われる症状を経験していた人は多いようです。重度の熱中症を防ぐには、熱中症により引き起こされる症状を把握し、初期症状を自覚したらすぐに対処することが大切です。

◆“暑さによって引き起こされたからだの不調”で自覚したことがあるもの〔複数回答形式〕 ※2020年調査の上位10位までを表示
対象:熱中症になったことがない人



◆熱中症になったことが「ない」と回答した人が熱中症の症状に該当する不調を感じたことがある割合
熱中症になったことがない人[n=768]

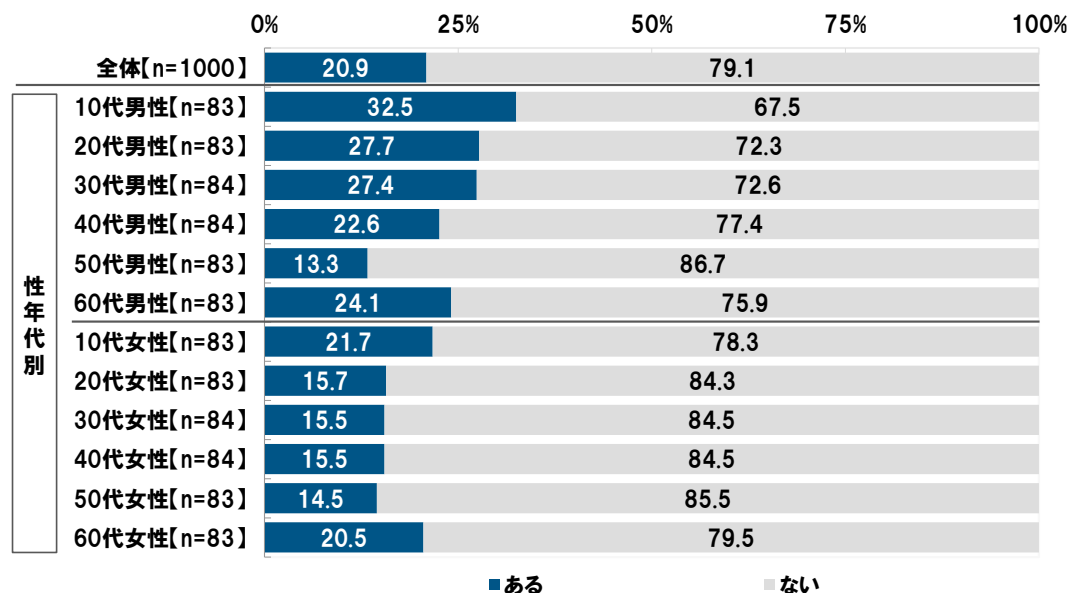


■ 自分は大丈夫という過信は禁物！「熱中症にならない自信がある」5人に1人、10代男性では3人に1人

全回答者(1,000名)に、“熱中症にならない”という自信があるか聞いたところ、「ある」は20.9%、「ない」は79.1%となりました。“熱中症にならない”と過信して熱中症対策を十分に行っていない場合、熱中症になるリスクが高まります。

性年代別にみると、「ある」と回答した人の割合は男女とも10代が最も高く、10代男性は32.5%、10代女性は21.7%でした。

◆ “熱中症にならない”という自信があるか [単一回答形式]



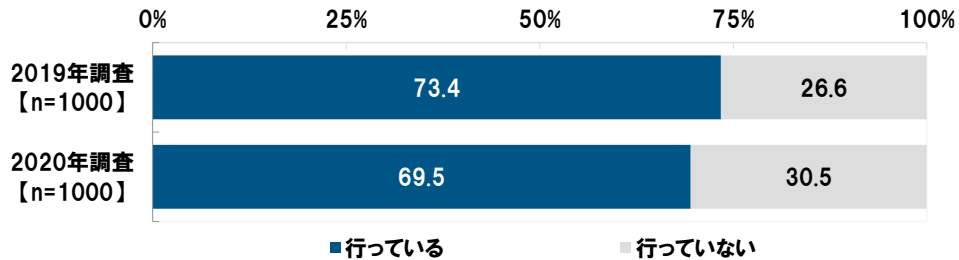
■「暑い時期に熱中症対策を行っていない」3割 *

■実践している熱中症対策 1位「水分補給」2位「扇風機・エアコン使用」、「温湿度計の使用」は6人に1人とどまる *

続いて、熱中症の対策について質問しました。

全回答者(1,000名)に、暑い時期に熱中症対策を行っているか聞いたところ、「行っている」は69.5%、「行っていない」は30.5%となりました。

◆暑い時期に熱中症対策を行っているか [単一回答形式]

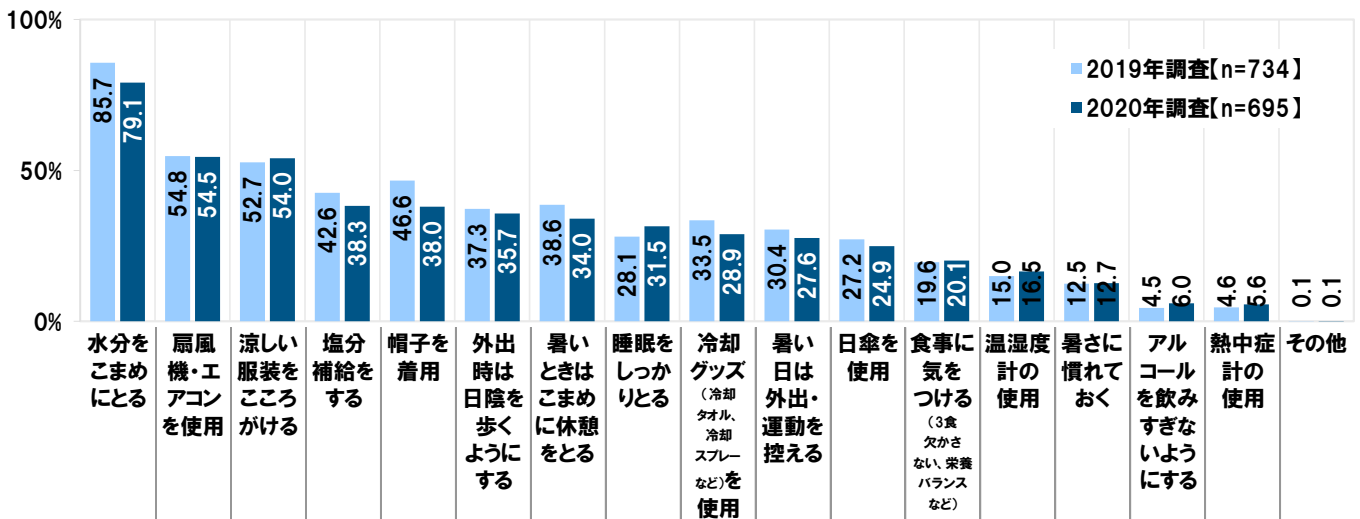


では、どのような熱中症対策を行っている人が多いのでしょうか。

暑い時期に熱中症対策を行っている人(695名)に、どのような対策を実施しているか聞いたところ、「水分をこまめにとる」(79.1%)が最も高く、次いで、「扇風機・エアコンを使用」(54.5%)、「涼しい服装をこころがける」(54.0%)、「塩分補給をする」(38.3%)、「帽子を着用」(38.0%)となりました。熱中症対策として、水分・塩分の補給のほか、からだの中に熱をためないように注意をしている人が多いようです。そのほか、「温湿度計の使用」は16.5%と、6人に1人が実践している熱中症対策として挙げました。温度や湿度を確認しながら生活することで、熱中症になるリスクを下げることができますが、実践している人は少数派であることがわかりました。

◆熱中症対策として行っていること [複数回答形式]

対象:暑い時期に熱中症対策を行っている人

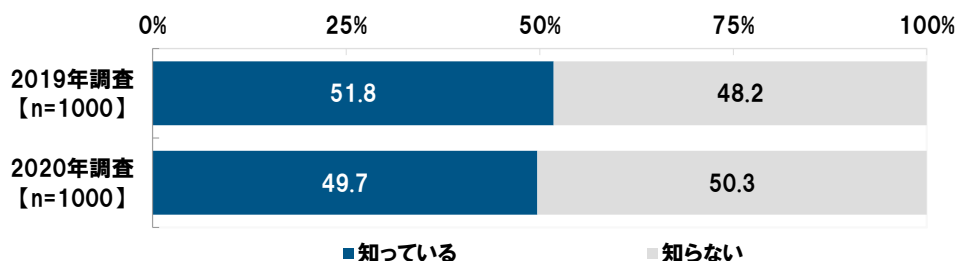


■熱中症に対する知識 「熱中症になったときの対応・処置を知らない」5割、「熱中症について学んだことはない」6割

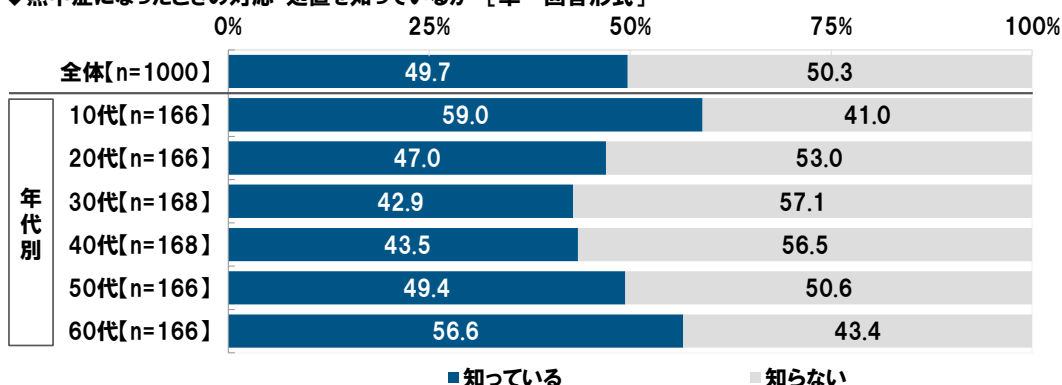
全回答者(1,000名)に、熱中症になったときの対応・処置を知っているか聞いたところ、「知っている」は49.7%、「知らない」は50.3%と、双方が拮抗する結果となりました。

年代別にみると、「知らない」と回答した人の割合は30代(57.1%)と40代(56.5%)が高く、6割近くになりました。

◆熱中症になったときの対応・処置を知っているか [単一回答形式]



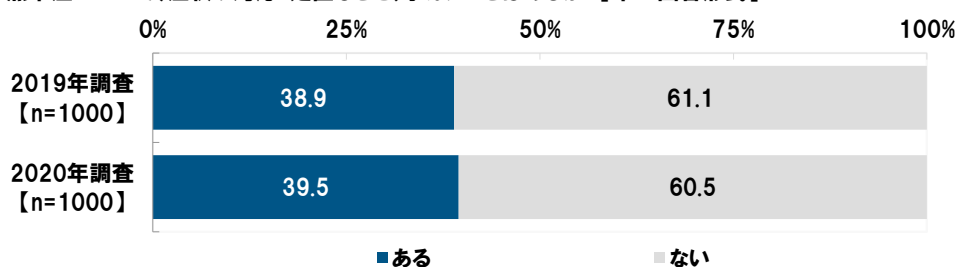
◆熱中症になったときの対応・処置を知っているか [単一回答形式]



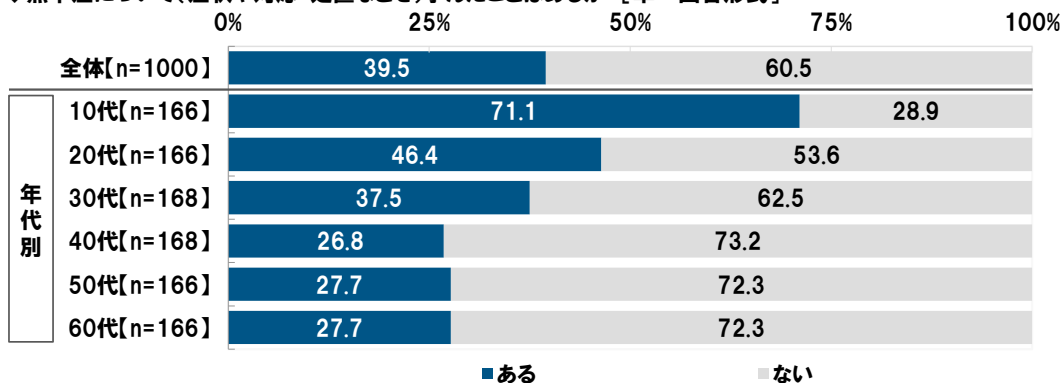
また、熱中症について(症状や対応・処置などを)学んだことがあるか聞いたところ、「ある」は39.5%、「ない」は60.5%となりました。

年代別にみると、「ない」と回答した人の割合は、年代が上がるにつれ高くなる傾向がみられ、40代以上(40代73.2%、50代72.3%、60代72.3%)では7割以上となりました。

◆熱中症について(症状や対応・処置などを)学んだことはあるか [単一回答形式]



◆熱中症について(症状や対応・処置などを)学んだことはあるか [単一回答形式]



第3章 新型コロナウイルス感染症拡大による行動変容とそれに伴う熱中症リスク

■「新型コロナウイルス感染症拡大で、自宅で過ごす時間が増えた」7割強、暑熱順化の不足が懸念される結果に

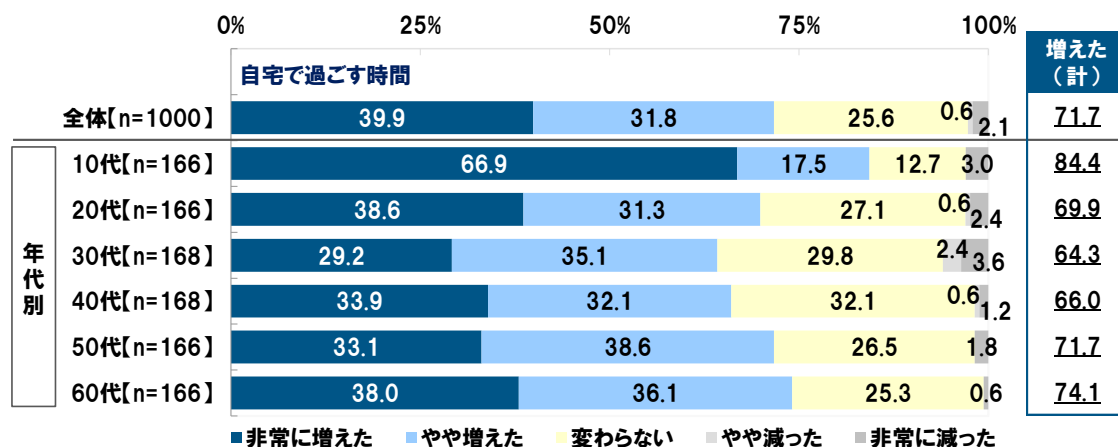
■「新型コロナウイルス感染症拡大で、自宅で運動をする時間が増えた」約3割、屋内での熱中症リスクに要注意

新型コロナウイルス感染症拡大による生活の変化について質問しました。

全回答者(1,000名)に、新型コロナウイルス感染症拡大によって、《自宅で過ごす時間》にどのくらい変化があったか聞いたところ、「非常に増えた」は39.9%、「やや増えた」は31.8%で、合計した『増えた(計)』は71.7%となりました。自宅で過ごす時間が長くなると、暑熱順化に遅れが生じて急な暑さからだがついていかず、熱中症のリスクが高まってしまのおそれがあります。

年代別にみると、『増えた(計)』と回答した人の割合は、10代(84.4%)が最も高くなりました。

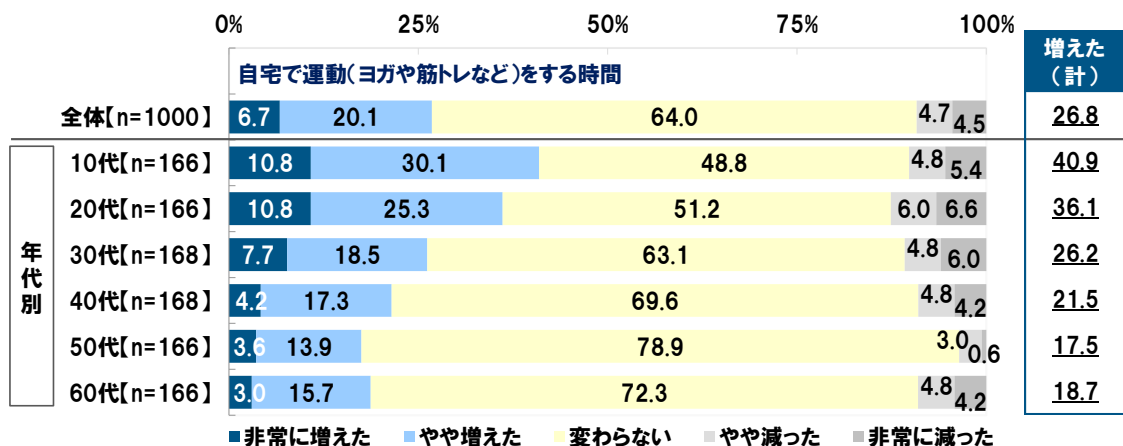
◆新型コロナウイルス感染症拡大によってどのくらい変化があったか [単一回答形式]



また、《自宅で運動(ヨガや筋トレなど)をする時間》にどのくらい変化があったか聞いたところ、『増えた(計)』は26.8%となりました。外出自粛が要請されるようになってから、自宅での運動を習慣にするようになった人は少なくないようです。ただ、運動をすると体感温度が上がりやすいため、屋内で運動をする際は、十分に熱中症対策をしたうえで取り組む必要があります。

年代別にみると、『増えた(計)』と回答した人の割合は若い年代ほど高い傾向がみられ、10代では40.9%となりました。

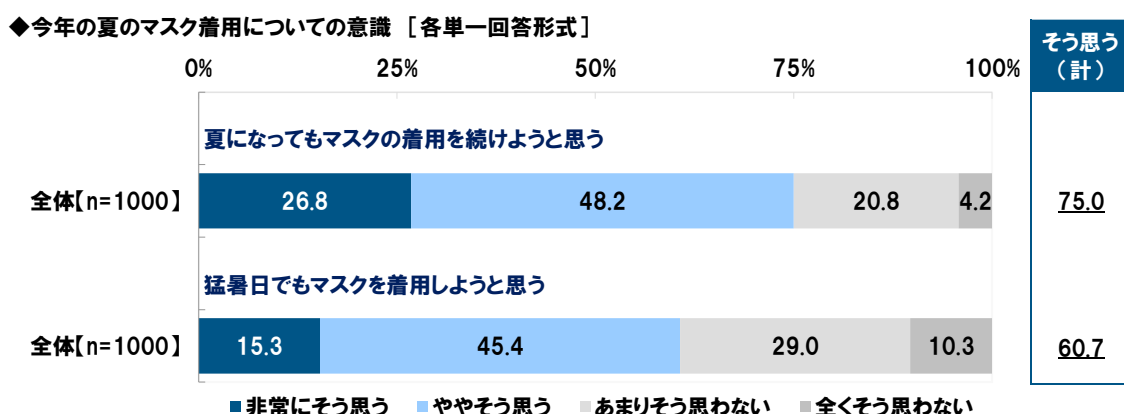
◆新型コロナウイルス感染症拡大によってどのくらい変化があったか [単一回答形式]



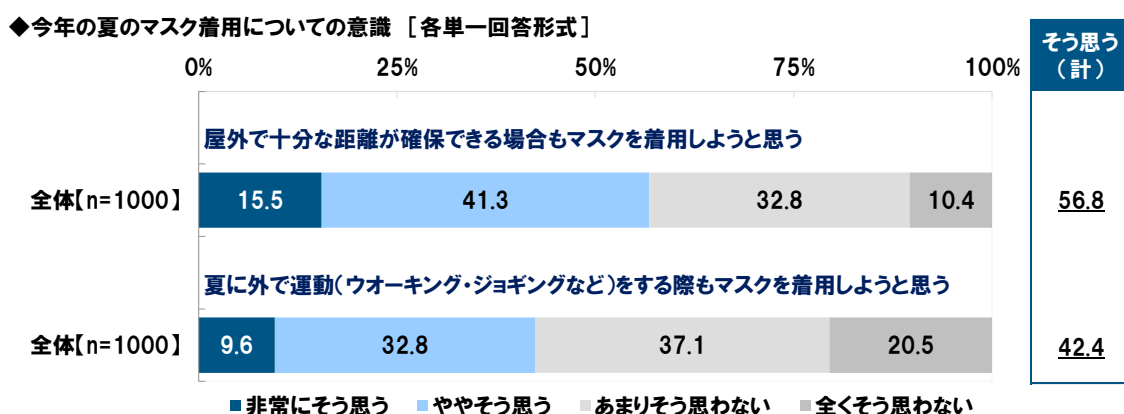
- 今夏のマスク着用意向「夏になってもマスクの着用を続けようと思う」7割半、「猛暑日でも着用しようと思う」6割 *
- 「屋外で十分な距離が確保できる場合もマスクを着用しようと思う」約6割 *
- 「夏に外で運動をする際もマスクを着用しようと思う」4割強、マスク着用による熱中症リスク増大が懸念される結果に *

全回答者(1,000名)に、今年の夏のマスク着用意向について質問しました。

夏になってもマスクの着用を続けようと思うか聞いたところ、「非常にそう思う」は26.8%、「ややそう思う」は48.2%で、合計した『そう思う(計)』は75.0%となりました。猛暑日でもマスクを着用しようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は60.7%となりました。



また、屋外でのマスク着用について、屋外で十分な距離が確保できる場合もマスクを着用しようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は56.8%となりました。夏に外で運動(ウォーキング・ジョギングなど)をする際もマスクを着用しようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は42.4%となりました。高温・多湿の環境下、直射日光を浴びる屋外で、体温が上昇する運動の最中もマスク着用を継続しようとすることは、熱中症リスクの増大に繋がります。

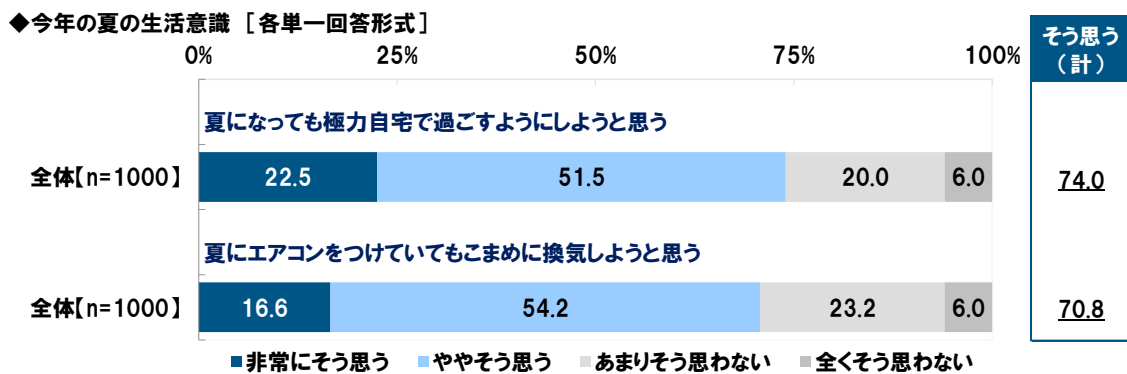


■「夏にエアコンをつけていてもこまめに換気しようと思う」7割、換気時には熱中症対策にも意識を向ける必要あり *
 ■実は勘違い？ “夏は室温を28℃以下にキープ”する人の半数以上が「エアコン使用時は設定温度を28℃に」と回答

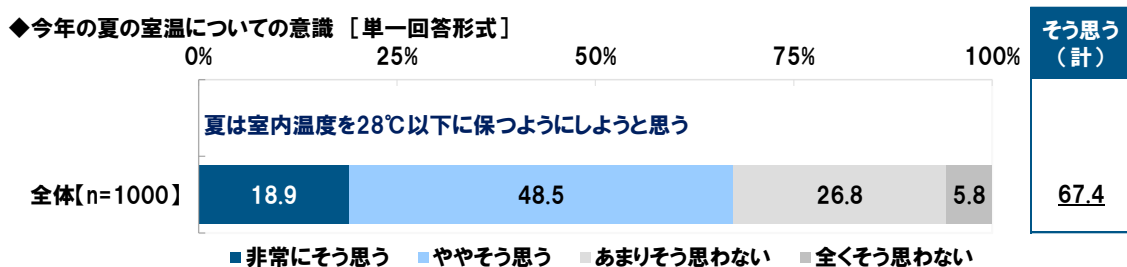
続いて、全回答者(1,000名)に、今年の夏のエアコン利用について質問しました。

まず、夏になっても極力自宅で過ごすようにしようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は74.0%となりました。

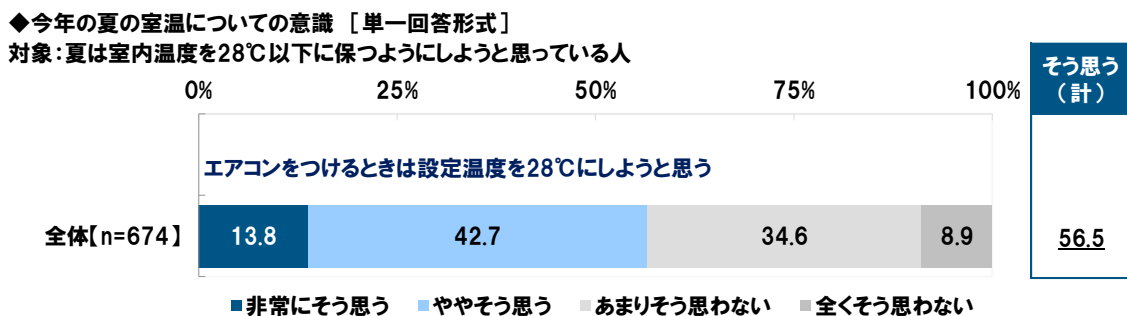
屋内の換気について、夏にエアコンをつけていてもこまめに換気しようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は70.8%となりました。換気を繰り返すことで室内温度が上がりやすくなってしまい、エアコンをつけていても熱中症のリスクが高まるおそれがあります。そのため、エアコンがついている場合でも、室内の温度や湿度に気をつけるなど、熱中症対策を意識した過ごし方が大切になります。



また、夏は室内温度を28℃以下に保つようにしようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は67.4%となりました。



ここで、今年の夏は室内温度を28℃以下に保つようにしようと思っている人(674名)に、エアコンをつけるときは設定温度を28℃にしようと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は56.5%となりました。クールビズで目安とされている“室温28℃”を、“エアコンの設定温度28℃”と理解してしまっている人が多いのではないのでしょうか。



■「自宅より職場のほうが快適」在宅勤務予定者の6割強

■「在宅勤務中は水分補給を忘れがちになっていると思う」在宅勤務予定者の5割強

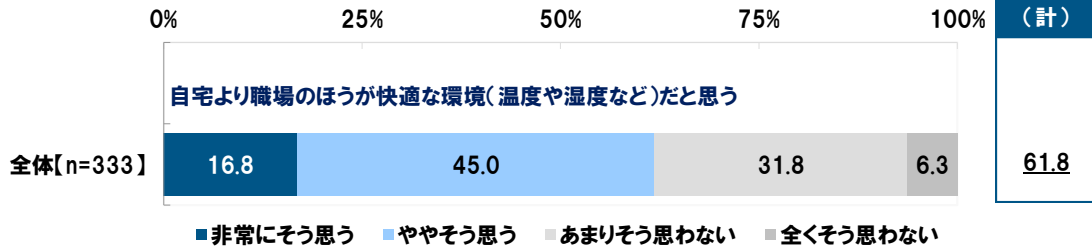
■「在宅勤務中、電気代の節約のためエアコン利用を極力控えたい」在宅勤務予定者の半数以上 *

最後に、今年の6月以降に在宅勤務をすることがある人(333名)に、在宅勤務中の過ごし方について質問しました。

自宅より職場のほうが快適な環境(温度や湿度など)だと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は61.8%となりました。

◆在宅勤務中の過ごし方についての意識 [単一回答形式]

対象:今年の6月以降に在宅勤務をすることがある人

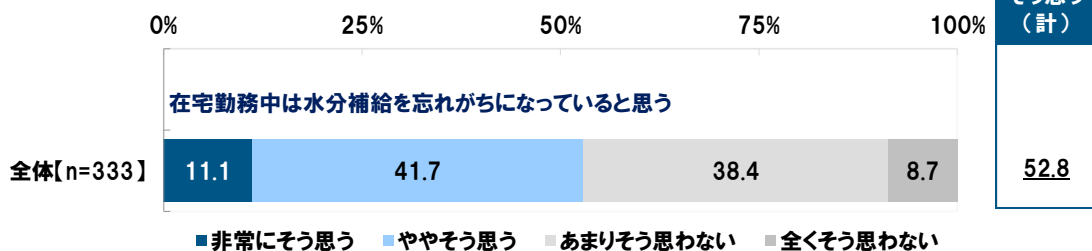


また、在宅勤務中は水分補給を忘れがちになっていると思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は52.8%となりました。さらに、在宅勤務の際は、電気代の節約のためエアコンの利用を極力控えたいと思うか聞いたところ、『そう思う(計)』は54.3%となりました。水分補給を忘れてしまったり、エアコンを使わないことで室内温度が高くなってしまったりすると、熱中症のリスクが高まります。在宅勤務中も、適時水分補給を行うことや、室内温度を28℃以下に保つよう適切なエアコン利用をこころがけることが、熱中症予防には有効です。

今夏は、新型コロナウイルス感染症予防のための“新しい生活様式”における熱中症対策を確認し、適切なマスクの着用やエアコンの利用などを意識的に行って、十分に注意していく必要があるのではないのでしょうか。

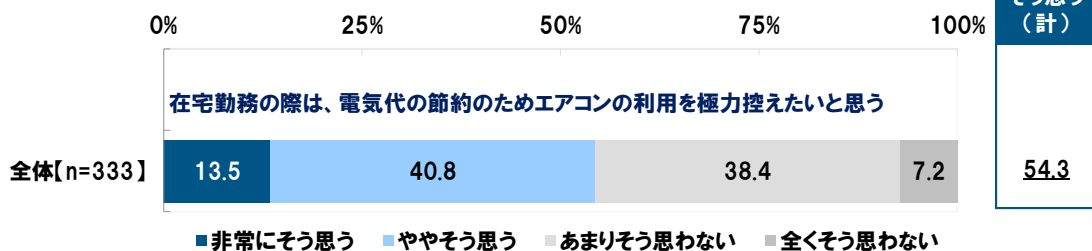
◆在宅勤務中の過ごし方についての意識 [単一回答形式]

対象:今年の6月以降に在宅勤務をすることがある人



◆在宅勤務中の過ごし方についての意識 [単一回答形式]

対象:今年の6月以降に在宅勤務をすることがある人



注:本調査レポートの百分率表示は小数点第2位で四捨五入の丸め計算を行っているため、単一回答形式の質問の場合、内訳の計と合計が一致しない場合や、全ての内訳を合計しても100%とならない場合がございます。

《調査概要》

- ◆調査タイトル :熱中症に関する意識・実態調査2020
- ◆調査対象 :ネットエイジアサーチのインターネットモニター会員を母集団とする
全国の15歳-69歳の男女
- ◆調査期間 :2020年6月5日-6月8日
- ◆調査方法 :インターネット調査
- ◆調査地域 :全国
- ◆有効回答数 :1,000サンプル
- ◆実施機関 :ネットエイジア株式会社

■■報道関係の皆様へ■■

本ニュースレターの内容の転載にあたりましては、
「タニタ調べ」と付記のうえ
ご使用くださいますよう、お願い申し上げます。

■■会社概要■■

- 代表者名 :代表取締役社長 谷田 千里
- 設立 :1944年1月
- 本社所在地 :〒174-8630 東京都板橋区前野町 1-14-2
- 事業内容 :家庭用・業務用計量器(体組成計、ヘルスマーター、クッキングスケール、活動量計、歩数計、塩分計、血圧計、睡眠計、デジタルカロリースケール、タイマー、温湿度計)などの製造・販売